

舞踊教育における即興表現の可能性に関する検討

——「即興性」に関する一考察——

岡本 悦子・村田 芳子

1. 研究目的及び研究方法

即興は「計画され、推敲された作品にはない輝きを尊ぶ考えにたつ創造的活動である」¹⁾といわれる。一方で、吟味や推敲を含め、緊密に全体を構築することを重視する立場では即興を斥けている²⁾。しかし、即興の本質とされる「内発性は、創造行為の最も自然かつ純粋なあり方であり、生きた形態」³⁾である限り、創作を学習に組んでいる舞踊教育において、即興は無視できない問題であると考えられる。

本研究では、教育における即興表現の可能性を探る作業の初段階として、そもそも即興とはどういう特徴をもつ活動であるか、他分野を含めた広い表現行為を対象に考察を進める。

研究方法としては、まず、言語として定着している「即興」と呼ばれるもの、及び「あらかじめ準備することなく、その場で思いつくままに創り出すこと」という広義の「即興性」を有する表現行為を対象にそれらの歴史的背景や内容を文献によって調べ、共通に浮上してくる特徴を「即興性」の特徴として明らかにする。

考察対象
(即興性をもつ表現行為、あるいはそれに関わる人物)

音楽：バロック音楽、教会のオルガン演奏
インド音楽、ジャズ、現代音楽
演劇：コメディア、デラルテ
スタニラフスキー、太陽劇団
文学：即興詩、連歌
芸能：にわか
美術：パフォーマンス
舞踊：イサドラ・ダンカン
マース・カニングハム

2. 結果及び考察

(1) 共通に浮上する「即興性」の特徴

①「即興」とは創造することと現前化することが同時に進行されることであり、これらはすなわち同一人物の行為である。心に自ずからわき起こる面白味をさす「興」とは作者（演者）の内発性に他ならないが、「興」は作者と演者の分離化によって異質なものにならざるを得ず、再現技術や情報伝達技術の発達によって、作者・演者という人間不在のコミュニケーションを可能にした現在

においては、更に受け手には距離感のあるものとなっている。

②「即興」は演者同士あるいは演者と観客が場を共有する際に起こる。創りつつある現在がそのまま演じられていることは、観客を含めた場の環境に影響を受ける可能性をもつことであろう。

③「即興」は可変的な活動形式である。一般にはある種の枠組みや前提の中での行為とみなされるが、更に枠組みはその規模や緊密さにおいても多様であり、また枠組み自体が可変的である場合もある。前提には、演者のタイプや経験、意欲などといったもともと可変的な人間をも含まれると考えられる。

④「即興」では不確定性や偶然性を許容し、変化に対して自在な対応ができること、かつ、周囲を触発しうるエネルギーを有することが重要となり、それが楽しめるという演者の前提がある。

⑤「即興」は常に発見を探求するプロセスであり、ひたすら美的な満足を求めて「現在に集中する」行為である。

(2) 「即興性」の担うもの

「即興性」は時代の変革期に出現し、また出現したあとの存続期間は短いものが多い。時代に敏感に反応を示し、その時代精神を反映して従来のもに新たな刺激を与えるという、変革の原動力となる役割を担うといえる。

3. まとめ

総括すれば、即興は、自発的に行動を起こし、自らの変化のみならず場の環境にも柔軟に対応し、起こっていることについて直ちに美的判断を下しては、再び探求にかかるという能動的な流れの繰り返しであるとみることできる。この過程は、自らの可能性を信頼する主体的な学習過程そのものであるといえないだろうか？

今後の課題

本研究では、広い分野から「即興性」を読むことで学習への橋懸かりとしたが、今後は舞踊の独自性を踏まえた考察を要すると思う。

- 1) 佐々木健一「日本大百科全書」即興の項 小学館
- 2) 3) 佐々木健一「美学辞典」'95東京大学出版会